



愛隣幼稚園.....

園だより

.....19. 7月

自分を好きでいられるように

「せんせい、きょう、かわいい！」私がただ、スカートを履いているだけでも、女の子たちはそんなふうに声をかけてくれます。「なんか、いつもとちがう・・・」男の子たちはそんな言葉で見慣れない私の服装を言い表します。「どこいくの?」「外のお仕事行ってくるね。」園長としての仕事は園内だけでなく、月の3分の1くらいは様々な会議などのため、子どもたちには見慣れない服装で、私は出かけていきます。先日は門での「おはよう」をお休みさせてもらい、千葉市内の療育機関へ出かけました。来年度の就園を考えている保護者の方に、保育園や幼稚園のことをお話しする会が開かれ、私は幼稚園への入園について説明をするためにでかけました。千葉市の幼稚園が特別な支援を必要とする子どもたちを受け入れている実態、幼稚園を選ぶときに考えてほしいことなどをお伝えしました。真剣な表情で熱心に話を聞いてくださいました。質疑応答の際、お母さんたちからたくさんの切実な想いを伺いました。

「私の子どもはまだ、歩くことができません。入れてくださるという幼稚園はあったのですが、今年は入園を見送りました。周りの子どもたちが皆歩けるのに、それをうちの子は見ていることしかできないのはかわいそうで。」そう仰るお母さん。別の方は「他の子と同じようには出来ないと思うんだけど、だから余計にいろいろなことを経験させてあげたいんです。少しでも他の子と同じに出来るようになったら嬉しいじゃないですか。」と。またひとりの方は「この子のペースで、この子なりに成長していることは分かっているんだけど、それでいいと思っているけど・・・。」お話を聞きながら、私も考え込んでしまいました。本当の気持ちはここにあることが伝わってきました。同じではないこと、同じにはならないこと、ひとり一人皆違っていて、違うことがいいと理解していても、そう心から思うことのできないお母さんたちです。思いを汲みながらも私はそれはあくまで“親の思い”なんだよね・・・とあれこれ思い巡らしながらお話をして帰ってきました。

少し時間が経ちましたが私はまだ考えています。子どもは親を選ばずに、命をいただいて生まれてきます。子どもは親に守られ育まれて成長していきます。人間の赤ちゃんはひとりでは生きていくことができません。それで親に依存し、世話をしてもらいながら大きくなっていきます。そしてひとり一人は、皆、違う一人として、その子の人生を歩んでいきます。しかし、親と呼ばれる大人はちょっとした勘違いをしています。私のところに生まれてきたこの子は、私の所有物であるという勘違いです。確かにこの命は、あなたの家族として命をいただきました。しかし、この命はあなたのものではありません。その命の持ち主は、その子自身です。もし歩くことが出来なかったとしても<自由に動くことができない>ことを残念に思うかどうかは、その子自身が感じて考えることです。その子でない人が勝手に<かわいそう>と決めてかかることはありません。同様に、皆と同じことが出来ないからといって、それで<悲しい>かどうか、その子でない誰かが勝手に決めることではないのです。まして同じにならない君には価値がない、などということにもならないのです。どんな命の価値も、一つの物差しで測ることなど不可能です。もし、何かの基準によって命の価値を測ろうとすれば、私たちは再び過去に起こした誤りを繰り返すことになりかねないと私は考えてしまいます。

「自閉症の僕が跳びはねる理由」という本の中で、東田直樹さんは何が一番辛いですか?という問いに「自分のせいで悲しんでいる人がいること」、普通の人になりたいですか?との問いには「自分を好きになれるのなら、普通でも自閉症でもどちらでもいい」と答えています。そう、今ここにいるこの子の親になった私たちは、この子が生まれてきたことを喜び、この子が自分を好きになれるように全力で応援する私たちであることを望まれているのです。簡単なことはありません。でもそうやって、「あなたはあなたのままで大事なひとり」と育てられた人は必ず、自分を愛し、他者を愛する人になる、その未来に価値を置く親でありたいと思います。